

『大いなる遺産』と『坑夫』の一人称の語り：疑似教養小説における視点と主人公
駒澤大学 川崎明子 (ak2mar_maduke@hotmail.com)

発表の構成

『大いなる遺産』と『坑夫』

- ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) 『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-1)
- ・夏目漱石 (慶応 3 年～大正 5 年、1867-1916) 『坑夫』(明治 41 年、1908)

英語の論理と日本語の論理

- ・ < 鳥の視点 > と < 蛇の視点 >
- ・ 述語と西田幾多郎の < 場所の論理 >

時枝誠記の日本語文法論：「詞」はいつでも「辞」に包まれる。

例「匂いの高い花が咲いた」

詞：1「匂い」 2「匂いの高い」 3「匂いの高い花」4「匂いの高い花が咲く」

辞：1「の」 2 零(なし) 3「が」 4「た」

- ・ 主語：文を統一する「I」と述語に規定される「私」

『大いなる遺産』冒頭

『坑夫』の坑道潜り

物語としての自己、自己としての物語

引用

判断は主語と述語の関係から成る、苟も判断的知識として成立する以上、その背後に広がる述語面がなければならぬ、何処までも主語は述語に於いてなければならぬ、判断作用といふ如きものは第二次的に考へられるのである。所謂経験的知識といえども、それが判断的知識であるかぎり、その根柢に述語的一般者がなければならぬ。すべての経験的知識には「私に意識せられる」といふことが伴はねばならぬ、自覚が経験的判断の述語面となるのである。普通には我といふ如きものも物と同じく、種々なる性質を有つ主語的統一と考へるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点ではなくして一つの円でなければならぬ、物ではなく場所でなければならぬ。我が我を知ることができないのは述語が主語となることができないのである。(西田幾多郎「働くものから見るものへ」後編「場所」 『西田幾多郎全集』第3巻、469頁)

My father's family name being Pirrip, and my christian name Philip, my infant tongue could make of both names nothing longer or more explicit than Pip. So, I called myself Pip, and came to be called Pip.

I give Pirrip as my father's family name, on the authority of his tombstone and my sister – Mrs. Joe Gargery, who married the blacksmith. As I never saw my father or my mother, and never saw any likeness of either of them (for their days were long before the days of photographs), my first fancies regarding what they were like, were unreasonably derived from their tombstones. The shape of the letters on my father's, gave me an odd idea that he was a square, stout, dark man, with curly black hair. From the character and turn of the inscription, "*Also Georgiana Wife of the Above,*" I drew a childish conclusion that my mother was freckled and sickly. (*Great Expectations*, 3. 下線発表者)

Ours was the marsh country, down by the river, within, as the river wound, twenty miles of the sea. My first most vivid and broad impression of the identity of things, seems to me to have been gained on a memorable raw afternoon towards evening. At such a time I found out for certain, that this bleak place overgrown with nettles was the churchyard; and that Philip Pirrip, late of this parish, and also Georgiana wife of the above, were dead and buried; and that Alexander, Bartholomew, Abraham, Tobias, and Roger, infant children of the aforesaid, were also dead and buried; and that the dark flat wilderness beyond the churchyard, intersected with dykes and mounds and gates, with scattered cattle feeding on it, was the marshes; and that the low leaden line beyond, was the river; and that the distant savage lair from which the wind was rushing, was the sea; and that the small bundle of shivers growing afraid of it all and beginning to cry, was Pip.

"Hold your noise!" cried a terrible voice, as a man started up from among the graves at the side of the church porch. "Keep still, you little devil, or I'll cut your throat!" (*Great Expectations*, 3-4. 下線発表者)

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立っている所まで行くと、初さんは、右へ曲がった。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻のように歩いて、段々をさあ何町降りたか分からない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑の中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切って、だいぶ浮世とは縁が遠くなったと思ったら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云っても坑を切り広げたもので、上と下がすばまって、腹の所が膨らんでいるから、まるで酒甕の中へでも落込んだ有様である。あとから分っ

た話だが、これは作事場と云うんで、技師の鑑定で、ここには鉱脈があるとなると、そこを掘り掘げて作事場に作るのである。(『坑夫』591-92頁)

近頃はてんで性格なんてものはないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらえるのと云って得意がっている。読者もあの性格がこうだの、あだのと分ったような事を云ってるが、ありゃ、みんな嘘をかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがってるんだろう。本当の事を云うと性格なんて纏ったものはありゃしない。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたって、小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は纏めにくいものだ。神さまでも手古ずるくらい纏まらない物体だ。(『坑夫』435-36頁)

小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくて好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんもそうである。もっと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。(『坑夫』529頁)

参考文献

- 宇津木愛子 『日本語の中の「私」 国語学と哲学の接点を求めて』 創元社 2005年
- 榎本博明 『<私>の心理学的探究 物語としての自己の視点から』 有斐閣 2005[1999]年
- 大門正幸 『「主語」とは何か? 英語と日本語を比べて』 風媒社 2008年
- 荻野昌利 『視線の歴史 <窓>と西洋文明』 世界思想社 2004年
- 金谷武洋 『英語にも主語はなかった 日本語文法から言語千年史へ』 講談社選書メチエ 2004年
- 『日本語に主語はいらない 百年の誤謬をただす』 講談社新書メチエ 2002年
- 柄谷行人 『増補 漱石論集成』 平凡社ライブラリー 2001年
- 川崎明子 「『デイヴィッド・コパフィールド』における英雄と英雄崇拜:一人称の語りと作家の自伝」 テクスト研究会 『テクスト研究』 第4号 2008年
- < <http://texts.at.infoseek.co.jp/page4.html> >.
- 小森陽一 『出来事としての読むこと』 東京大学出版会 1996年
- 島田雅彦 『漱石を書く』 岩波新書 1993年

- 下村寅太郎 『下村寅太郎著作集 12 西田哲学と日本の思想』 みすず書房 1990年
 フランツ・シュタンツェル 『物語の構造 <語り>の理論とテキスト分析』 前田彰一 訳
 岩波書店 1989年
- 時枝誠記 『国語学原論』 上下巻 岩波文庫 2007年
- 富山太佳夫 編 『現代批評のプラクティス 1 ディコンストラクション』 研究社 1997年
- 中村雄二郎 『中村雄二郎著作集 7 西田哲学』 岩波書店 1993年
 『中村雄二郎著作集 10 トポス論』 岩波書店 1993年
- 夏目漱石 『夏目漱石全集 4 虞美人草 坑夫』 ちくま文庫 1988年
- 新形信和 『日本人の<わたし>を求めて 比較文化論のすすめ』 新曜社 2007年
- 西田幾多郎 『西田幾多郎全集』 岩波書店 2002~09年
- エミール・バンヴェニスト 『一般言語学の諸問題』 岸本通夫 監訳 みすず書房 1983年
- 藤田正勝 『西田幾多郎 生きることと哲学』 岩波新書 2007年
- 松村昌家 編 『比較文学を学ぶ人のために』 世界思想社 1995年
- 森田良行 『日本人の発想、日本語の表現 「私」の立場がことばを決める』 中公新書 1998年
 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房 2006年
- 山岡實 『「語り」の記号論 日英比較物語分析 増補版』 松柏社 2005年
- Benveniste, Emile. *Problems in General Linguistics*. transl. by Mary Elizabeth Meek. Coral Gables, Florida: University of Miami Press, 1971.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge, Mass. and London: Harvard University Press, 1992.
- Bruner, Jerome. "Life as Narrative." *Social Research*. 54. 1 (1987): 11-32.
 ----. "The 'remembered' self" in Neisser and Fivush.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Oxford: Oxford University Press, 1994 .
- Neisser, Ulric and Robyn Fivush, eds. *The Remembering Self: Construction and Accuracy in the Self-Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press, 2008 [1994].
- Rimmon-Kenan, Shlomith. *Narrative Fiction: Contemporary Poetics*. London and New York: Routledge, 1983.
- Sell, Roger D. *New Casebooks: Great Expectations*. Basingstoke: Macmillan, 1994.
- Stanzel, Franz. *Narrative Situations in the Novel*. transl. by James P. Pusack. Bloomington and London: Indiana University Press, 1971.